鳴門教育大学研究紀要
第34巻　2019

ワイマル共和国中・後期の政治的暴力に関する研究の現状

原　田　昌　博

（キーワード：ワイマル共和国，政治的暴力，社会史，政治文化）

はじめに

本稿は，ワイマル共和国中・後期（1924年～1933年）における政治的暴力に関するこれまでの研究史をたどり，その論点を整理することを目的としている。

周知のとおり，ワイマル共和国は1918年11月に発生したドイツ革命の結果として誕生した。革命中のスパルタクス団と義勇軍の内戦，さらには共和国政府に対する左右両翼からの蜂起や政治的暗殺など，ワイマル共和国史は共和国前期（1919年～1923年）を内戦状態として描いてきた。これに対して，1923年11月のナチスによるミュンヘン一揆の失敗は暴力で溢れた前期の区切りとみなされ，1925年に再建されたナチスが表面的には選挙での勝利を目指す「合法路線」に転換したこともあって，共和国中・後期に関しては，しばしば政治的暴力よりも議会政治や選挙，経済，あるいは国際関係の問題が中心的に扱われている。1929年に発生した世界恐慌以降，ナチスが勢力を伸張させ，最終的に第一党となった後にヒトラーが首相に指名されることでナチス体制へと移行していくことになったが，この共和国後期（1929年～1933年）におけるナチスの台頭も，共和国史ではしばしばナチスの選挙での勝利の過程として描かれている。しかし，ナチスが選挙での地滑り的勝利をあげた1930年代初頭にドイツ各地の街頭ではナチスや共産党による政治的暴力の問題が深刻化していたのであり，数多ある共和国史ではこの点が言及されないか，言及される場合でも特定の大規模な事件のみにとどまっていた[1]。

こうした状況に対して，D.ブラジウスは2005年の著書の中で共和国後期の政治的街頭闘争を「忘れられた内戦 Der vergessene Bürgerkrieg」と呼び，共和国崩壊原因の分析に「内戦」，つまり「政治的暴力」の視点が欠けていると指摘している[2]。その後，S.ヴォルコフも「ワイマルの政治生活の暴力的性格」が「同時代人には明らかであったが，歴史家によって過小評価されるか，ぞんざいに扱われてきた」と述べて，不十分な研究状況に言及している[3]。こうした指摘に呼応するかのように，2000年代に入って出版されたワイマル共和国史では中期以降，とりわけ末期における「政治的暴力」の状況が記述されるようになってきている。例えば，2006年発行のU.クルーゲの共和国史ではナチス突撃隊や共産党系の赤色前線兵士同盟などのパラミリタリー組織が取り上げられ，1932年夏を中心にドイツ国内の内戦状況が描かれている[4]。この他に，U.ビュットナーやA.シルトの共和国史もパラミリタリー諸組織による街頭闘争を扱っている[5]。

このように，近年のワイマル共和国史では共和国末期における政治的暴力に関する記述が増加する傾向にあり，「ワイマル共和国の最後の数年を決定づける政治的に動機づけられた暴力行為[6]」という認識も定着しつつあると言えよう。他方で，欧米での個別具体的な研究レベルでは，すでに1960年代から，このテーマに関する一定の成果が発表されてきた。以下では，この半世紀にわたって蓄積されてきた研究の変遷をたどっていきたい。

1．研究の変遷

(1)　政治的暴力とは

「政治的暴力」とは，単純化して言えば，「政治的な動機を持った暴力」である。G.ボッツはこれを①社会的構造や政治的権力の担い手に対して使用される身体的暴力，②逆に国家権力が反国家・反社会的集団に対して行う「合法的」な暴力行為，③社会的・政治的集団（政党・国防団体など）相互の闘争の中で使用される暴力の3つに区分し，さらに「関与者数」と「組織状態」を基準に「暗殺」，「襲撃」，「衝突」，「クーデタ」，「蜂起」など16種類の政治的暴力の形態を提示している[7]。また，P.マークルは，ワイマル期の政治的暴力を①共和国初期の左翼革命的組織と反革命義勇軍・自警団 Einwohnerwehr の間の衝突，②右翼による政治的暗殺やテロ，③ポー

ランド国境やフランス占領下のルール地方でのナショナリスティックな暴力行為，④大規模なパラミリタリー組織による街頭闘争の４つに区分している[8]。さらに，D.シューマンによると，「政治的暴力」とは原則として集合的に発生し，政治体制や政治的敵対者への打撃を与えるために人体もしくは器物に対して行使される暴力であり，大きくは「暗殺 Attentat」，「蜂起 Aufstand」，「反乱 Putsch」，「騒擾 Unruhe」の４つに区分される。このうちワイマル共和国の政治的暴力の多くが属する短期的な騒擾には，政治的敵対者間および政治的集団と警察の間での衝突 Zusammenstoß，政敵への一方的な襲撃 Überfall，集会におけるホール内乱闘 Saalschlacht などが含まれている[9]。本稿では国家権力を相手にした「体制転覆型暴力」から政敵同士による街頭での「日常的暴力」までの広い意味で「政治的暴力」という表現を用いるが，そこではボッツの定義の③，マークルの区分での④，シューマンの言う「騒擾」が対象となる。

⑵　パラミリタリー組織研究

ワイマル共和国中・後期における政治的暴力の研究の端緒は，その行動主体となったナチ党の「突撃隊 Sturmabteilung der NSDAP（SA）」や共産党の「赤色前線兵士同盟 Roter Frontkämpferbund（RFB）」，社会民主党を中心とする共和国擁護派の「国旗団 Reichsbanner Schwarz- Rot - Gold（RB）」，右翼・保守派の「鉄兜団 Stahlhelm, Bund der Frontsoldaten」や「青年ドイツ騎士団 Jungdeutscher Orden（Jungdo）」といったパラミリタリー組織に関する研究であった。SA に関しては，当初は例えば K.D.ブラッハーらの共著，D.オーロウや P.ヒュッテンベルガーの研究に見られるようにナチ党史の一部として言及されることが多く，SA そのものを扱うモノグラフが増加するのは1980年代に入ってからである[10]。一方，RB や RFB に関しては比較的早い段階からモノグラフが出されており，RB に関しては K.ローエや東独の H.ゴチュリヒ，RFB に関しては，K.G.P.シュスターや東独の K.フィンカーの研究が代表的である[11]。こうした組織別の研究に対して，各党派の組織を「パラミリタリー政治」として包括的に捉えたのが J.M.ディールであり，この研究を吸収しつつ，わが国において先駆的に「パラミリタリー組織＝政治闘争団体」を組織別に分析したのが岩崎好成氏の一連の研究である[12]。これらの研究に共通しているのは，組織の時系列的な発展過程，組織構造や社会的構成，あるいは各党指導部との関係を分析の中心としている点であった。こうした研究の結果，1980年代までにパラミリタリー組織の発展史や組織構造はかなり解明され，さらに個々の組織を「パラミリタリー組織＝政治闘争団体」として共通して捉える視点も定着するに至ったが，政治的暴力それ自体に関しては十分な分析が行われることはなかった。

⑶　社会史研究の始まり

こうしたパラミリタリー組織の研究を下敷きにしつつ，各地域に残された史料を用いて草の根のレベルで政治的暴力を分析したのが1980年代の英米圏の研究者たちであり，中でもその嚆矢となったのが R.ベッセルと E.ローゼンハフトであった。

ベッセルは1978年の論文ではパラミリタリー組織をその展開や構造という従来の視点から分析していたが[13]，1984年には東プロイセン地域を事例にワイマル期の政治的暴力を社会史的な手法で描いた著書を発表した。その中で，彼は政治的暴力を社会史レベルで解明する意義を次のように述べている。「私が関心を持っているのは，ナチ党の組織的な歴史を辿ることよりも―それはすでに何度も行われている―ナチスが支持を集め，左翼反対派を粉砕し，1933年初頭に支配を固めた手段を研究することである。同時に，ミュンヘンやベルリンのナチ指導部の視点からではなく，下からこのプロセスを吟味したいと思う。…とりわけ，私が探りたいと思っているのは，ナチスが権力につく際に政治的暴力が果たした役割である。この点はナチ運動の抬頭の一つの側面であるが，歴史家たちは決まってその重要性を指摘するものの，深い分析はほとんど行われてこなかった[14]」。また，同書では政治的暴力がワイマル共和国末期に蔓延していた点も指摘されている。「ワイマル体制が崩壊するまでに，政治的暴力を逃れていた都市や町はドイツにはほとんどなかった。…それ［政治的暴力］はドイツの政治的風景の中でどこにでもある特徴となった。政治的暴力はもはや新聞の中で読むだけの出来事の問題だけではなく，ほとんどすべての都市の近隣社会や町，さらには農村部でも何らかの形で発生していた[15]」。さらに，1986年の論文ではドイツ全土を視野に入れながら1930年代初頭のナチスの台頭と政治的暴力の関係が次のように指摘されている。「1920年代初頭のミュンヘンのビアホールでの運動の始まりから，暴力的衝突はナチの政策のかすがいであった。そして，1930年代初頭には，ナチ運動の爆発的成長はドイツの街頭での政治的に動機づけられた衝突の数の驚くほどの増加に並行していた[16]」。

もう一人のローゼンハフトも1978年の論文でワイマル共和国における政治的暴力の原因をパラミリタリズムに

求めてパラミリタリー組織を分析の対象としたが，その視線は組織の展開や構造よりもそうした組織を可能にしたワイマル期のドイツ社会に向けられていた。彼女は政治的暴力を生み出す潜在的な暴力性を当時のドイツ社会が孕んでいた問題とみなし，この暴力性がワイマル共和国特有 endemic のものであり，しかもそれが地域内の政治的日常の中で維持されていた点を強調している[17]。すなわち，暴力の問題を組織のレベルを越えて社会全体の文脈で捉える必要性がいち早く認識されていたのであり，この「地域内での日常における政治的暴力」をドイツ共産党を軸にして描いたものが1983年の著書である。同書の冒頭で，ローゼンハフトはワイマル期の共産党とナチスの抗争を考える場合，「指導部や公式の政策レベルだけで党組織を研究すること」では不十分であり，共産党の「運動の最底辺のレベルで進行していた事態を検証する」ためにベルリンのケーススタディを通じて一般党員の状況を明らかにする必要を訴えている。ここでも，ローゼンハフトは「大規模であれ，個人的なものであれ，あらゆる種類の暴力はワイマル共和国の政治生活にとって特有のものであった」と述べ，中でも街頭が「政治的暴力の新しい形態のための焦点」となった点を強調しており，「キーツ Kiez」と呼ばれる狭い近隣社会 neighbourhood を単位として共産党とナチスの闘争を社会史的な手法で解明しようとした[18]。「ベルリンで暴力が増大していったのは，ナチ党によるまさにこういった挑戦［共産党の牙城である近隣社会への侵入］によるところであり，ナチスと共産党員の間の闘争は近隣社会における労働者階級の生活の諸制度の周辺で，またその中に存在していた亀裂に沿って展開した[19]」。ローゼンハフトはその後，1995年の論文の冒頭で「ワイマル共和国の最後の数年は，政治的日常の中での身体的暴力の増大によって規定されていた」と述べて，ワイマル共和国末期の政治的暴力を論じているが，そこでも分析の中心に置かれたのは近隣社会における状況であった[20]。

両者の研究はワイマル共和国の「政治的暴力の社会史」の出発点をなすものであり，これらの研究が発表された1980年代中頃以降，ワイマル期の政治的暴力を扱う研究では，各党の政策決定やパラミリタリー組織の展開・構造よりも，政治的暴力の主体となった都市部の労働者地区などの「近隣社会」の人びとの対立・衝突とその行為内容の具体層での解明に重点が置かれるようになっていった[21]。

⑷ 社会史研究の定着

英米圏での社会史研究の進展を受けつつ，1990年代以降，ドイツ語圏でも同種の研究が発表されるようになった。本格的な研究は1993年の Ch.シュトリーフラーに始まり，その後，M.L.エールス，D.シュミーヒェン＝アッカーマン，A.ヴィルシング，D.シューマン，S.ライヒャルト，O.レシュケ，J ヒュルベルト，D.シュミットが立て続けに研究を発表し，この間に英米圏でも P.スウェットの詳細な研究が登場している[22]。これらの研究は地域研究（シュトリーフラー，エールス，シュミーヒェン＝アッカーマン，シューマン，レシュケ，ヒュルベルト，スウェット）や他国との比較研究（ヴィルシング，ライヒャルト）の形で行われ，多くは特定地域内での政治的暴力の実態をその地域の事情を踏まえた上で解明しようとしている[23]。

このうち，ワイマル共和国における政治的暴力と政治文化の関係という視点から2001年のシューマンの著書を取り上げてみよう。この中で，シューマンはザクセン地方を事例に政治的暴力を分析しているが，まず注目すべきは，彼がワイマル期全体を射程に入れている点である。「ワイマル共和国の成立という妥協により，原理的には，階級と利益の間の軋轢を真に民主的な形で決着させるチャンスが与えられた。このチャンスが利用されることはなかった。最初の数年の内戦的闘争から最終局面におけるナチスと共産党の血なまぐさい衝突まで，暴力が新しいドイツの共和国に刻印を押していた[24]」。シューマンによると「総じて暴力は限定的で，犠牲者の数や損害の種類はむしろわずか」であり，それゆえ彼はワイマル共和国中期以降の政治的暴力を「ささやかな暴力 Kleine Gewalt」と呼び，前期と区別するとともに，その中心的な分析概念としている[25]。「たとえ一見するとそう見えるとしても，殺害や内戦的な闘争はワイマル共和国の政治的暴力に関して総じて典型的なものではなかった。むしろ，この研究が示したのは，1921年から33年までの暴力が公共的領域とシンボルをめぐる闘争の形態で発生したということであり，その闘争はしばしば儀礼化された特徴を帯び，限定的な手段の投入によって性格づけられた。街頭闘争やホール闘争でのこの「ささやかな」暴力によって，政治における基本的妥協の不在と国家による暴力独占の部分的な廃棄が明らかになった。その限りで，暴力は政治過程の継続的な負荷として影響を及ぼし，一方では，ワイマル共和国における政治的な対立が「通常通り」，すなわち原則として平和裏に進行することを妨げた[26]」。シューマンはこの「ささやかな暴力」をワイマルの「政治文化の特徴を理解するメルクマール[27]」とみなし，政治的文化の分節化・断片化の視点からザクセン地方の事例を検討している。彼の研究は2000年代に入って政治的暴力をワイマル期の政治文化との関係で捉える見方が定着したことを示すものである。

次に，地域研究の視点からフリードリヒスハイン，プレンツラウアーベルク，ミッテ，クロイツベルクといっ

たベルリンの労働者地区を事例にしたレシュケの研究を取り上げてみたい[28]。例えば，2014年の著作の中で，彼はワイマル共和国，特にその末期における政治的暴力を重視して次のように述べている。「ワイマル共和国の末期は公共空間における優位をめぐる政治的な衝突によって刻印されていた。その際，急速に２つの主要な競争相手が形成され，ナチスと共産党の政党軍が内戦のような闘争を展開した。ホール内闘争や街頭闘争，政敵やその常連酒場 Verkehrslokal への襲撃，あるいはプロパガンダのための不法行為が当時は日常茶飯事であった[29]」，「確かにすでに以前より激しい衝突は起こっていたが，SA と共産党の間の対立は1929年の晩夏以降エスカレートしていったとされる。死者が出ることも稀ではなかった激しい衝突は，こうしてワイマル共和国末期のベルリンの日常になった[30]」。彼の問題関心は一貫して，ワイマル共和国後期（1929年以後）にベルリンの労働者地区へのナチスの侵入は成功したのかという点に置かれ，いずれの研究でもナチス，共産党，警察，地域住民の関係がミクロなレベルで分析されている。

もう一つ，英米圏での先駆的業績であるローゼンハフトの研究を発展させ，同じくベルリンを事例に政治的暴力の問題を扱った2004年のスウェットの著作を取り上げてみたい。彼女の研究はこのテーマに関する社会史研究の一つの到達点であると言ってよい。ローゼンハフトが共産党の側から侵入してくるナチスへの対抗をモチーフにしたのに対して，スウェットは共産党とナチスを対等なアクターに位置づけ，労働者地区という「場」を重視しつつ，そこでの住民たちと政治的暴力の関係を扱っているところに特徴がある。彼女はその研究の目的を「首都の住民たち，とりわけ労働者地区に住む者たちが共和国の崩壊をいかに経験し，それにいかに関与したかを検証すること」だとする。「このようにすることで，私が強調するのは，急進化したベルリン市民たちの自暴自棄よりもむしろ積極的な関与であり，彼らはワイマル期の大変動に能動的に向き合い，結局のところ，しばしば予期しないやり方で，民主主義の消滅とナチ体制の正当化に寄与することになったのである[31]」。スウェットはこう述べることで，ワイマル共和国の崩壊と地域レベルでの政治的暴力の活発化を結びつけようとした。かつて「忘れられた内戦」として共和国史であまり言及されてこなかった政治的暴力の問題が彼女においては共和国崩壊の重要な要因と位置づけられることになったのである[32]。こうして，スウェットは「1930年代初頭には全くありふれたものになった暴力は，広範で，血なまぐさく，そして確実に政治的安定を脅かすものであった[33]」という認識に立って，その「暴力の論理」を解明しようとした。その際，彼女は政治的暴力の多くが「地域暴力 local violence」であった点に注目し，暴力の主たる原因が「縄張りの境界争い」であり，犯人も被害者も多くの場合，攻撃場所の近くに居住していたと主張している[34]。こうした「自分たちの街頭を守る」行動をスウェットは「縄張り主義 territorialism」と呼び，「ワイマル共和国末期のベルリンで発展した…新しい政治文化」であったとしている[35]。その上で，彼女はあらためて地域的な政治的暴力をワイマル共和国崩壊の一因として強調している。「ベルリンでの政治的暴力は，共和国の崩壊にとって極めて重大な意味を持つ政治的に独立した事例として研究されるべきである。暴力は暴動に参加した数百人程度の共産主義者やナチスよりも多くの者が政治的変化の手段として社会的に受容するものになった。…われわれが探究しなければならないのは，それぞれの特殊な文脈の中で暴力がなぜ，どのようにして変化を生み出す正当な手段とみなされるようになったのかということである。…おおよそ400万人のこの街で，わずか数千人のみがワイマル共和国の最後の数年の間で絶えず政治的暴力に加わっていた。しかしながら，活動家の数がわずかであることは，暴力が政治的・社会的な安定への脅威ではなかったことを意味しない。…1930年代初頭までに，ベルリンでは政治的危機を非暴力的に終わらせることがほとんど想像できなくなっていた[36]」。

こうした地域研究としての社会史の他に，ワイマル期の警察研究も「警察による秩序維持行動」の観点で政治的暴力の問題を取り上げてきた。この分野での研究としては，1970年の H.H.リャンの古典的研究をはじめ，Ch.グラーフ，P.レスマン＝ファウスト，C.ダムスなどが挙げられる[37]。一般に政治的暴力に関する研究の中では，警察（特に現場の警官）の反共産主義的傾向や親ナチ的／反共産党的な対応が指摘されるが，これらの警察研究ではワイマル期のプロイセンあるいはベルリン警察の中立的性格あるいは秩序維持のための努力という側面が強調されている。例えば，リャンは「ワイマル期全体を通じて，ベルリン保安警察の主要任務は，街頭での常に差し迫った政治的カオスから街を守ることだった[38]」と述べ，グラーフはワイマル期のプロイセン警察の中立性について「共和国の政治警察は基本的に左翼・右翼の過激派への客観的な態度と法的に平等な扱いに腐心していた」というテーゼを示している[39]。いずれにせよ，これらの研究は警察の動向にとどまらず，広くワイマル期の社会・政治状況にも言及した総合的な研究であり，政治的暴力の研究においても有用である。

もう一つ言及しておかなければならないのが，一部の社会史研究に見られる全体主義論的な解釈である。周知のとおり，全体主義論とは共産主義とファシズム（ナチズム）を同質的と捉え，それらを民主主義や自由主義に

敵対する思想や運動とみなす考え方であり，第二次世界大戦後から60年代にかけての冷戦期のアメリカで反共思想の一端を担ったものである。1960年代後半以降，全体主義論は退潮となるが，1989年の東欧革命後には再び研究の中に登場することになった。ワイマル民主主義の下で政治的暴力の主体となったのがナチスと共産党であったため，この分野の研究でも両者を一括して民主主義の敵と捉える見方が出されるに至った。そこでは，労働者地区の住民に多かった共産主義者や共産党支持者をナチスの侵入に対する抵抗者とみなす見解に対して，彼らの「攻撃性」がナチスと同列化されており，すでに名前を挙げたシュトリーフラーやヴィルシングの研究でそれが顕著である。ちょうど全体主義論が復活しつつあった1993年の著作の冒頭で，シュトリーフラーは以下のように述べている。「騒々しく発生した相互の敵対は，決して意図的な共通性を排除するものではない。反議会主義的な性向や反ブルジョア的なルサンチマンは，左翼急進派と右翼急進派の精神世界を特徴づけていた。共産主義者もナチスも既存の体制を拒否する点で一致していた[40]」，「両者は政治，経済，文化における国家の完全な変革のために闘っていた。議会制民主主義体制の代わりに，２つの政治的潮流は独裁を打ち立てようとしていた。全体主義政党として，両者は自らのイデオロギーの独占的指導権に公然と信仰告白していた。両者は人権や市民権を拒否し，すべての政敵を弾劾して，自由主義体制に反対していた[41]」。この時期の他の全体主義論的解釈と同様に，シュトリーフラーの意図は，ナチスと同等の暴力性を共産党側も備えていたことを強調し，それを「過小評価」してきた歴史研究を批判することにあった。「ファシズムが共産主義者を正当防衛の状況に追いやったことで共産主義者の暴力を免責することはあってはならない。多くの事例が共産主義者の襲撃行動の計画性を証明しているのである。したがって，共産主義者にだけ予防的攻撃 Präventivschläge の権利を認めるのはまったく正当ではない。…後になって，ナチスだけを非難することはできないのである[42]」。「偏見のない物の見方」を強調する彼の姿勢には，共産主義の「残虐性」を強調してナチスを相対化しようとする意図が透けて見え，この点で同じく「アクターの対等性」の視点から近隣社会内でのナチスや共産党の動向をできる限り客観的に再構成しようとするスウェットとは異なるものである[43]。

以下では，これまで挙げてきた研究を踏まえながら，「政治的暴力の社会史」を「パラミリタリズム」，「政治文化」，「近隣社会」，「プロパガンダ」という４つの視点から整理していきたい。

２．「政治的暴力の社会史」の射程

⑴　パラミリタリズム

ワイマル共和国における政治的暴力の背景として，これまでの多くの研究で言及されてきたのが，ワイマル期のドイツ社会に蔓延していたとされる「パラミリタリズム」である。すでに紹介したディールの1977年の研究はワイマル共和国の「パラミリタリー政治」を包括的に扱っていたが，以後の社会史研究でも暴力の要因としてのパラミリタリズム及びその行動主体としてのパラミリタリー組織が取り上げられている。

まず，ベッセルは1978年の論文の中で以下のように述べて，ワイマルの政治におけるパラミリタリズムの影響を指摘している。「多数の政治的な風景の中でパラミリタリー的・軍国主義的な組織がワイマル期の極めて重要なメルクマールの一つであった[44]」。ローゼンハフトもパラミリタリズムを「市民的軍国主義 ziviler Militarismus」と表現し，やはりそれを戦間期ドイツの特徴とみなしている[45]。このパラミリタリー的・軍国主義的な風潮は第二帝政期以来の伝統であり，ワイマル共和国誕生時の暴力的状況の中で義勇軍などの兵士の一部がその後もその伝統を引き継ぎ[46]，その「軍国主義的行動形態」がワイマル期の日常の中で「政治」を体現したとされる[47]。こうした風潮の中でワイマル共和国中期に登場してくるのが SA や RFB などのパラミリタリー組織であり，それらは軍国主義的メンタリティを維持し，敵と味方の明確な区別（自己犠牲の賛美と敵の悪魔化）やヒエラルヒー構造に基づく思考様式で共通していた[48]。このパラミリタリー組織を通じてワイマル期のドイツ社会では「公的生活の軍隊化[49]」が進行し，公的空間でのデモと政治的暴力が頻発することになったが[50]，グラントもこの点について以下のように述べている。「武装部隊はワイマルドイツにおける政治の重要な特徴であり，ヒトラーの党は「政党軍」を持つ点で異常ではなかった。…SA は他の武装集団と戦闘を行い，同盟を形成し，時には単に共存していただけでなかった。SA は数多くの類似した組織の一つに過ぎず，従って広範囲に及ぶパラミリタリ―文化の文脈でのみ完全に理解できるのである[51]」。

ワイマル期の政治的暴力の研究はまずパラミリタリー組織の研究としてスタートし，それから社会史研究へと移っていったが，政治的暴力を中心的に担ったパラミリタリー組織とその背後にあるパラミリタリズム・軍国主義の分析は不可欠であり，SA などの組織分析は今なお活発に行われている。

⑵ ワイマル共和国の政治文化

ワイマル期のドイツ社会におけるパラミリタリズムの蔓延に重ねて，多くの研究はワイマル共和国の成立から崩壊までドイツ社会が内戦的な風土を抱えていた点を指摘してきた（ここでいう内戦的な風土とは内戦状態そのものではなく，政治的暴力を生み出す社会状況を指す）。例えば，ローゼンハフトは1979年に「1920年代や30年代初頭において内戦に似た状況に至った」と述べ，Th.バリスティアは1989年にワイマル期の政治対立が「内戦への傾向を持っていた」と指摘している[52]。最近でも，シュミットが1932年のドルトムントの状況を「常に真の内戦の淵すれすれ」，ジーメンスが1930年代初頭のベルリンでの SA と RFB の衝突を「内戦に似た衝突」と表現し，ヴォルコフは1929年から33年にかけてのドイツ社会を「武装した社会」とみなし，特に都市の労働者地区では暴力が「万人の生活の一部」になっていたと述べている[53]。

こうした視点に立って，ワイマル期の政治的暴力に関する研究は相対的安定期以降のドイツ社会における暴力の遍在性を強調している。例えば，ベッセルは1990年にワイマル共和国を「広く流布し，広範に受容された政治的暴力の行使を通じて形成された社会的・政治的風土[54]」とみなしており，さらに2015年の著書で次のように述べている。「ワイマル共和国が崩壊していくにつれて，多数の人びとが政治的な衝突で殺害され，数百人が負傷した。暴力はドイツの政治の遍在的な特徴となった[55]」。この点については，ローゼンハフトも1983年の著作の中で1920年代には政敵どうしの暴力的衝突が「ごく普通のもの」になったと述べ，シュトリーフラーは1993年の著書の中で1930年代初頭のベルリンについて「どこかで過激政党支持者間の重大な行動が起こらずに一週間が過ぎることはなかった」と記している[56]。近年では，ヴォルコフが「街頭闘争や政治的暗殺は至る所で猛威を振るい，両者は共和国期を通じて実際にはびこることになった」として，政治的暴力を「ワイマル共和国の特質 hallmark」と位置づけている[57]。

さらに，近年の研究はこうした暴力の遍在性をワイマル共和国の性質とは相容れない例外状況とはみなさず，むしろワイマル期の政治文化の一つの特質と評価している。H.G.ハウプトは2012年の著作の中で「もし暴力活動が罰せられなかったり，それどころか公衆の一部によって支持されるとすれば，それは国家の秩序維持の威信を揺さぶるだけでなく，暴力の文化を創りだすか，既に存在しているものを強化しうるであろう[58]」と述べているが，これまでの研究はワイマル期のドイツ社会をそれが現実になったものとして捉えてきたのである。例えば，ヤシュケとロイペルディンガーは政治的日常の中の「軍国主義的行動形態…すなわち，「大群」の集会，行進や行進歌，制服，旗や挨拶による政治的象徴の使用，準軍事的な美的形態は，特殊なワイマルの政治文化のキーワードであり，それらが具体的な機会を規範に似た行動の掟として接続したのである」と述べている[59]。また，シューマンはワイマル中期に出現した政治的暴力を「政治文化の特徴的なメルクマールが現れる広範囲の現象」と指摘した上で，この政治文化の特徴を，その中にある各集団間の最小限の合意形成すら欠いた「断片化」（差異）と「軍隊化 Militarisierung」や「軍国主義 Militarismus」の下での価値観や行動様式の一致（共通性）の二面性から捉えている[60]。さらに，P.M.シュルツも政治的暴力を「ドイツ社会の根本的な構成要素」に位置づけ，「それは根深く，さまざまな形で，そしてさまざまな機能を伴ってその政治文化に根づいていた」と指摘している[61]。

この視点に付随して，民主主義を標榜するワイマル憲法を持つ社会において暴力が忌避されるものではなく，むしろ一部の（しかし決して少なからぬ）者に「魅力」すら与えていた点も指摘されることになる。例えば，ベッセルは政治的暴力の主たる担い手である若者を引きつける暴力の「魅力」について以下のように述べている。「数百万の人びとがこうした暴力的なレトリックや自慢げな衝突に浸かった政党［ナチス］に票を投じたという事実，数十万の若者が SA―その機能がほとんど暴力的衝突の周辺で展開していた組織―に加入したという事実が指し示しているのは，こういった活動が魅力を持っていたに違いないということである[62]」。

政治的暴力をワイマル期の政治文化の特質とみなす研究は近年ますます増加しており，パラミリタリー組織の研究も基本的にこの方向へと進んでいる。SA に関しても，かつてのような組織構造や社会的構成の分析にとどまらず，ワイマル共和国の政治文化の中に SA を位置づけたり，政治的暴力を含む SA 隊員たちの日常に焦点を当てた研究が増大しており，近年の代表例としては Y.ミュラーと R.ツィルケナートが編集した論文集，A.ワッカーフスによる SA 内の同性愛や SA の共同体としての側面を扱った研究，さらにはワイマル期から第二次大戦までの時期を対象にした D.ジーメンスの研究が挙げられる[63]。また，2009年には C.フォイクトがザクセンを事例に RB と RFB の両組織を扱った詳細なモノグラフを発表しているが，そこでは両組織の成立と展開はもちろん，ワイマル共和国の政治文化という共通の土壌における両組織の儀礼やシンボル操作，さらにはナチスとの政治的街頭闘争も分析されている[64]。同様に，2016年に発表された南西ドイツを事例にした M.ベーレスの RB に関する研究もこうした研究動向を反映して，RB のシンボル政策，あるいはパラミリタリー組織としてのプロパガ

ンダ活動や政治的暴力が実証的に論じられている[65]。

ところで，政治的暴力をワイマル期の政治文化の表出と捉える立場では，暴力的な対立が分断された公共圏におけるヘゲモニー闘争として描かれている。そこでは，自立した市民による理性的な議論を通して形成された公論が公権力を制御し，それにより民主主義が機能するとJ.ハーバーマスが描いた「市民的公共圏」とは明らかに異なる暴力や様々なシンボル（象徴）がぶつかり合う姿が想定されている[66]。例えば，シュルツは「ワイマル共和国は競争的で著しく分極化された公共圏に刻印され，その中で政治的敵対者が激しく闘争していた[67]」と指摘し，シューマンは次のように述べている。「内戦期の後，この暴力は別の，限定的な，しかし同時に持続的な形態を帯びたが，それは公共空間の支配をめぐる敵対する政治陣営の闘争という形態であった[68]」。その際，「公共圏で政治的に新しいものとして自らを効果的に提示した」のがSAだとされる[69]。

さらにもう一点，政治的暴力をワイマル期の政治文化や公共圏との関連で捉えようとする研究では，ワイマル期からナチス期への連続性もしばしば指摘されている。早いものでは，ベッセルが1986年に「ワイマル期の最後の数年の数多くの暴力は，1933年における左翼の残忍な抑圧が受容される状況を助けた」と述べ[70]，1992年にはB.ヴァイスブロットが「戦後期全体におけるドイツ社会の政治文化の中での暴力の役割」を踏まえて「ワイマル共和国とナチズムの間のかすがい・橋渡しを考える可能性」に言及している[71]。その後も，スウェットが以下のように述べている。「暴力は政治的変化のための受容可能な道具になった。ナチス的な解決が不可避なものではなかったが，この社会の暴力との親和性，そして実際にワイマル共和国の最後の数年の間に暴力のある種の形態を受け入れたことは，明らかに1933年１月30日以後の蛮行の拡大と制度化を促進することになった[72]」。こうした指摘は，ナチスの暴力支配をワイマル期からの転換としてのみならず，ワイマル期とナチス期を非合法的な暴力の許容という視点で連続的に捉える可能性を示唆するものである。

⑶「近隣社会」への注目

「パラミリタリズム」や「政治文化」と並んで，社会史研究における重要な視点が地域単位としての「近隣社会」である。すでに指摘したように，この視点については，まず社会史研究の端緒を開いたローゼンハフトが「キーツ」の概念を用いて近隣社会内での政治的暴力の実態を分析したことに始まる[73]。彼女はワイマルの政治的暴力が人的結合（仲間）と地域（自分の居住区＝キーツ）の中で展開し，それが「常に地域の前提条件や関係性に規定されていた」と述べている[74]。同じく近隣社会を重視するスウェットは，近隣社会内での暴力の原因として「縄張り意識 sense of turf」（縄張りの獲得や維持），「地域内支配への願望」，「自らのコミュニティの防衛」などを挙げ，左翼・右翼を問わず近隣社会内での暴力の実践を「危機に瀕したコミュニティの物語」と呼んでいる[75]。

こうした視点では，政治的暴力の動機が組織への忠誠だけではなく，近隣社会への帰属意識からも説明されることになる。ローゼンハフトは1979年の論文の中でベルリンでの街頭闘争への参加の動機が組織への帰属よりも都市の若者のサブカルチャーと関連していたと指摘している[76]。それによると，ベルリンなどの労働者地区では参加者のリクルートはパラミリタリー組織や政党との結びつきよりもその地区の街頭や団地での人的結合にもとづいて酒場や知人の住宅で行われたという。近年では，F.レンガーが1929年５月のいわゆる「血のメーデー」を事例にして，地域住民の政治的な行動においては「地域社会のアイデンティティ」が優位に立っていたことを主張している[77]。

近隣社会での暴力の組織的主体はRFBやSAであったが，特に都市の労働者地区を事例にして共産党やRFBと近隣社会の関係が明らかにされてきた[78]。もともと共産党にとって重要だったのは工場（経営内）であったが，職住分離（住宅の郊外化）や失業者の増大により，1920年代後半に共産党の活動の中心は工場から近隣社会へとシフトしていった。共産党が牙城とした都市の労働者地区は高い人口密度と犯罪発生率，老朽化した建物，劣悪な衛生環境など「ひどい生活状況」によって特徴づけられていた[79]。K.メーネンはベルリンの労働者地区を「KPDの御料地 Domäne」と呼び，この近隣社会内での共産党の支配の状況を以下のように描いている。「この小規模な地理的単位の中で，KPDはあらゆる手段を用いて公共空間に対する統制権を作り出し，強化しようとした。つまり，自ら警察になろうとしたのである[80]」。マケリゴットはこの「インフォーマルな近隣社会のネットワーク」を共産党にとっての「社会インフラ」とみなし，その機能として部外者の識別，警察やナチスの侵入からの安全確保，追跡からの避難，警察捜査の妨害などを挙げている[81]。

これに対して，ナチス（SA）はこうした共産党の支配する近隣社会への侵入者として描かれてきた。一例を挙げると，ローゼンハフトは1983年の著作で，ベルリンのナチスが「共産党の近隣社会の牙城への侵入」を活動の最初の目標に掲げ，実際にこうしたナチスの挑戦によりベルリンでの暴力の高まりを引き起こしたと指摘して

いる[82]。その後，ライヒャルトがSAが「侵入者のように…共産党が強力な支持を集めていたキーツ内で活動した」ことで「絶え間なくエスカレートし続けていく暴力のスパイラルが始動した」と述べ，同様にレシュケが「プロレタリア的なキーツ内の伝統的なミリューの結びつきがSAの暴力的な侵入によって不安定化された」と指摘している[83]。ただ，近年ではこうした「共産党＝近隣社会住民」と「ナチス・SA＝侵入者」という図式とは異なる見方も示されている。例えば，ジーメンスは2017年の著作の中でジーメンスが共産党とSAの闘争を近隣住民どうしの闘いとして捉え返し，近隣住民の仲間意識に基づく「暴力の地域コミュニティlocal community of violence」が形成されていたとしている[84]。

⑷ プロパガンダとしての暴力

一般的に，暴力という行為そのものには，コミュニケーションとしての性格があるとされる。「暴力は法の毀損の抑止や処罰の意味で道具的であるだけでなく，他の手段ではもはやはっきりと表明することができない耐え難い不公正に対する絶望的な叫びという意味ではコミュニケーション的である。革命，蜂起，暴力的集会，しかしまた政治的殺人，暗殺，爆弾テロ，放火などはこの視点から解釈されうる[85]」。ワイマル共和国中・後期の政治的暴力，特にSAのそれについても，公衆や公共圏へアピールするプロパガンダの機能が備わっていたとの主張がなされてきた。

すでにマークルが1982年にSAやRFBの暴力行為のほとんどにプロパガンダ機能が付随していたと述べ，ヤシュケとロイペルディンガーも1983年に「自らの政党軍の誇示・行使した暴力がナチスにとっては，民主主義を廃棄するために有権者の自発的同意を得る手段だった」と記している[86]。1986年にはベッセルが「SAが実践したような暴力の政治は本質的にはプロパガンダであった」と述べている[87]。近年でも，ライヒャルトがSAの暴力が持っていた機能として「内に向けられた統合」と「外に向けられたプロパガンダの手段」を挙げ[88]，さらにメーネンも次のように述べている。「SAはこうした衝突［共産党との衝突］をかなり好んでいた。それは，SAにとって攻撃的なプロパガンダの一つの形態であり，共産党の闘士よりも活動的なことを示すチャンスであった。ナチスのレパートリーの中で暴力は重要な地位を占めていた。政敵に対する肉体的暴力や絶え間のないテロの方法は，SAにとって街頭と自分たちのための空間として独占しようとする試みであった[89]」。なお，ローゼンハフトはSAの暴力に備わっていたプロパガンダ的な機能を共産党側にも認め，両者の暴力の「明確な類似性」を指摘している[90]。

暴力がプロパガンダとして機能する場合，他の行為（大衆集会，行進，旗，シンボル，横断幕，ポスターなど）と同様，それを見る者に印象を残し，自陣営への支持を獲得することに主眼が置かれていた。この意味で，そうした暴力では相手を殲滅する意図は弱く，これまでの研究の中でもワイマル共和国中・後期の政治的暴力についてはその限定性が指摘されてきた。ベッセルは「概して，SAメンバーが関与した暴力は，かなり明確な限定の中で，またゲームのルールが一般に理解された状況において行われた」と述べ[91]，シューマンは次のように強調している。「多くの衝突において重要だったのは，自らの存在を示すこと，公然とした縄張りを守り通すこと，あるいは初めてそれを闘い取ることであった。激しく死人が出る可能性のある暴力の使用に対する境界線を越えることはめったになかった[92]」，「暴力の目的は多くの敵を可能な限り殺害したり，負傷させたりすることではなかった。この点で，1920年代にはドイツの街頭や広場で激しく続く内戦など存在しなかった[93]」。こうして，すでに紹介したように，シューマンはワイマル中期以降の政治的暴力を「ささやかな暴力」と定義したのである。

この暴力の限定性から明らかになるのは，ワイマル中・後期の政治的暴力が，とりわけそれがナチスから発する場合，国家権力（警察）との衝突を回避していた点である。この点についても，ベッセルが次のように明確に指摘している。「あらゆる暴力的レトリックにもかかわらず，突撃隊は国家権力に対する正面攻撃に関与しなかった。…これらのナチ活動家たちは，警察署や兵営を攻撃するほど狂ってはいなかった[94]」，「この暴力は国家権力を脅かすものではなかった。実際，それは警察が公的秩序を維持できず，軍が介入せざるを得ないような状況には達しなかった。つまり，実際のところ，社会的あるいは経済的秩序を脅かすものではなかったのである[95]」。レスマン＝ファウストも次のように述べている。「国家権力，すなわち警察や国防軍機関への直接の攻撃は，警官個人に対する個別テロは別として，例外的であった。いうまでもなく，両組織［SAとRFB］が禁止を回避しようとしたために，それは行われなかった[96]」。

こうした指摘は，ワイマル期を通して暴力を受容する政治文化が存在していた一方で，暴力の形が前期（1919年～1923年）における「対国家権力」の体制転覆型暴力から，中期以降（1924年以降）にはパラミリタリー組織間の街頭闘争型暴力へと変化していったことを示唆するものである。

3．ワイマル共和国における「街頭政治」

⑴「街頭政治」という視点

暴力を許容する政治文化にとって「街頭」はその舞台であり，政治的諸勢力は街頭の支配をめぐってヘゲモニー争いを展開していた。こうした「街頭における政治」，あるいは「街頭をめぐる政治」は近年「街頭政治 Straßenpolitik」と呼ばれている。この概念を最初に示したのは，第二帝政期の政治状況を分析した Th.リンデンベルガーの1995年の著作である[97]。

リンデンベルガーによると，第二帝政の後半（1900年～1914年）の社会民主党の成長とともに，街頭は政治的なデモや過激化したストライキ，警察と大衆のいさかいの場となったという。その際，権力側も自らの支配の正当性を街頭で示したため，街頭は権力側と大衆側の政治行動がぶつかる「戦略的に欠くことのできない政治アリーナ」となった。リンデンベルガーは「街頭における，街頭をめぐる様々な権力闘争」を「街頭政治」とよび，それを権力者側から行われる「上からの街頭政治」と「下からの街頭政治」に区分している。前者は国家の支配機能の維持・強化のために国家による暴力独占を徹底して街頭を日常的に統制し，同時に街頭を民衆の社会的規律化に利用することである[98]。一方，後者は「政治の外の政治」として街頭で民衆の直接行動（デモやストライキなど）が展開することであり，その中で暴力の可能性も生まれてくる[99]。リンデンベルガ―によると，1906年から1912年にかけて，ベルリンでは街頭や公共広場での国家権力（警察）と民衆の暴力的対立が最高潮に達したという[100]。

リンデンベルガーの指摘をワイマル期に援用したのが D.シュミットである[101]。シュミットはワイマル期の政治的暴力を考える上でその対立の「社会空間的次元」，つまり暴力が発生した「場」に注目する必要性を強調し，「街頭政治」を「近代における公共の街頭空間の政治化」，あるいは「幅広く多様な身体・象徴を通じての街頭における対立や街頭をめぐる対立」と位置づけている。さらに，シュミットは「下からの街頭政治」を「縄張り争い Terrainkampf」と読み換え，以下のように述べている。「街頭政治の参加者は，公共空間を占有しようと，あるいはそれを守り抜こうと努めるが，その際に従うのが象徴政治的戦略である。これを背景に，街頭政治は常に縄張り争いとして発生する[102]」。ここで示されるように，シュミットは街頭をめぐる闘いが「象徴闘争」として発現した点を強調している。「街頭をめぐる闘いは，象徴闘争として行われた。すなわち，自らのシンボル，旗，制服を邪魔されることなく街頭に示すことができた者が，街頭を支配したのである。それに応じて，相手側に重要だったのは，敵の縄張りに自らのシンボルを持ち込むことであり，このやり方あるいは別のやり方で自分の縄張りと理解している地域に敵が支配権を要求するのを阻止することであった[103]」。この象徴闘争から政治的暴力が生まれてきたのであり，「街頭の支配権をめぐる日常的な闘争は，とりわけ小規模で空間志向的な暴力行為の形で行われていた[104]」。

⑵「酒場」の役割

シュミットが述べているように，「街頭政治」の概念は，プロパガンダであれ，政治的暴力であれ，それが行われる「場＝街頭」に注目しているが，ワイマル期の政治的暴力に関して，これまでの研究の多くが街頭と並んで異口同音にその「場」として挙げてきたのが酒場である。

すでに1960年のブラッハーらの共著の中で，SAとRFBの闘争では「拠点として居酒屋Kneipenや飲み屋Spelunken が利用された[105]」との記述が見られる。ただし，酒場と政治的暴力についての詳細な分析は，やはり1980年代の社会史研究の進展を待たなければならない。ローゼンハフトは1981年の論文でベルリンでの SA の酒場（突撃隊酒場 Strumlokal）を「酒場の指令所 tavernheadquarter」と呼び，宿泊や飲食のみならず敵との闘争の「前哨地」として機能していた点を指摘しているが，その際，SA の酒場は共産党の縄張りへのナチスの侵入の手段・シンボルとして1930年代初頭のナチスの成長とともに増加していったとされる[106]。

これ以降，多くの研究で政治的暴力の発生場所としての酒場の存在が指摘されるようになった。例えば，シュミーヒェン＝アッカーマンは1930年代初頭のベルリンでは「酒場から酒場へと正真正銘の闘争」が行われていたと述べ，エールスは同時期のベルリンで政治的諸勢力による公的なデモ行進が禁止されると，暴力の舞台がナチスや共産党の常連酒場 Verkehrslokal へと移ったと指摘している[107]。同様に，ヒュルベルトはベルリンでのデモ禁止令の影響について以下のように述べている。「この新しい禁止令も，振り返ってみると，治安状況のさらなる不安定化を招いただけであった。左翼と右翼の間の暴力行為はそれによって阻止されることはなかった。ナチ

スの行進の間に衝突が起こる代わりに，以前よりも活発に常連酒場や突撃隊酒場の周辺で暴力行為が発生し，地区全体が恒常的・潜在的な街頭闘争地区となった[108]」。彼の指摘によると，「SA の突撃隊酒場と KPD および SPD の常連酒場の間では本格的で絶え間のない軋轢が発生した」のであった[109]。時期が前後するが，スウェットも政治的酒場を「政治的暴力の主要な場所」あるいは「自然発生的な暴力の最初の地点」とみなし，「ベルリンでの政治的暴力のほぼすべての行動は酒場とアルコールと何らかの関係があった」と述べている[110]。彼女によると，酒場の存在は政治的コンセンサスを意味しており，酒場を中心に政治的な縄張り意識が生まれていたという。

ワイマル期の政治的酒場の中でも，SA の酒場に関しては近年とりわけ研究が進んでおり，シュミーヒェン＝アッカーマン，ライヒャルトやジーメンスなどが SA 研究やベルリンの地域研究の中でこのテーマを論じている[111]。その中でも，ライヒャルトの2002年の著書はベルリンを事例にした突撃隊酒場の本格的な分析であり，研究の画期に位置づけられるものである。ベルリンの具体的な突撃隊酒場の状況にまで踏み込んで，その多様な社会的・政治的機能を明らかにした上で，ライヒャルトは以下のように述べている[112]。「闘争団体の酒場 Kampfbundlokal は共同体形成の中心的な場所であり，そこで若者の街頭集団やスラム街集団のそれと類似性を持つ暴力のサブカルチャーが形成された[113]」。

ワイマル期の街頭政治の中で酒場は政治的暴力の中心的な場所の一つであり，これまでも多くの研究が政治的暴力と酒場の関係に言及してきたが，こうした政治的酒場の実態についての研究はまだ十分に行われているとは言いがたい。「政治的酒場」を取り上げる際に必要とされるのは，分析対象とする地域の政治的・社会的状況を念頭に置きながら，酒場に集う人びとの日常的な，しかし政治的な「交わり」を明らかにすることであり，換言すれば，ライヒャルトの研究がそうであるように，酒場が担う政治的・社交的（コミュニケーション的）機能を解明することがワイマル共和国における街頭政治や政治的暴力を考える上で重要となるのである[114]。

おわりに

以上，本稿ではワイマル共和国中・後期における政治的暴力に関する研究の変遷をたどり，その論点を整理してきた。このテーマに関しては，1960年代には暴力の主体となった組織の分析がその中心であったが，1980年代に入ると英米圏で政治的暴力の社会史研究が始まり，1990年代以降，ドイツでも地域史料を駆使した研究が次々と発表されるようになった。政治的暴力の社会史では「パラミリタリズム」，「近隣社会」，「プロパガンダ」などの分析視角が提示されているが，これらは1980年代の英米圏での研究，特にベッセルやローゼンハフトの研究の中ですでに提起されており，政治的暴力の社会史はこの両者の研究を深化させる形で展開してきたと言ってよいだろう。こうした視点に加えて，近年では「政治文化」や「政治的酒場」の問題にも注目が集まりつつある。

冒頭で述べたように，ワイマル共和国中・後期の政治的暴力はこれまで共和国の通史の中では言及されることが少なく，言及される場合でもしばしば特定の事件だけが取り上げられる傾向が強かった。共和国末期の政治的暴力の記述が特定の事件のみに偏るのであれば，それは結果として政治的暴力の非日常性を強調すること，換言すれば，共和国中期以降での政治的暴力の遍在性を捨象してしまうことにもつながってしまうだろう[115]。これに対して，政治的暴力の社会史は，それが発生した「場」（近隣社会・街頭・酒場）に注目し，日常性の中で政治的暴力を解明しようとしている。こうした方向での研究は，文書館に所蔵されている一次史料（警察・検察・裁判所関係文書など）を活用することでさらに継続されていくと考えられるが，その際には，上記の様々な視角を織り交ぜながら，また酒場の政治化や大衆政治におけるプロパガンダの問題などにも目を向けていく必要があるだろう。このテーマに関する研究の進展は，ワイマル共和国の崩壊やナチズム体制への移行を考える際の重要な視点を提供し，さらに広く「市民社会と暴力」の問題を考える上でも一つの素材にもなるのではないだろうか。

註

[1] 例えば, Schulze, Hagen, *Weimar: Deutschland 1917－1933*, Berlin 1982, Möller, Horst, *Die Weimarer Republik: Eine unvollendete Demokratie*, München 1985, Kolb, Eberhald, *Die Weimarer Republik*, München 1986（柴田敬二訳『ワイマル共和国史―研究の現状』刀水書房，1987年），Niedhart, Gottfried, *Deutsche Geschichte 1918－1933: Politik in der Weimarer Republik und der Sieg der Rechten,* Bonn 1994, Grevelhörster, Ludger, *Kleine Geschichte der Weimarer Republik 1918－1933: Ein problemgeschichtlicher Überblick,* Münster 2002. 特定の事件とは，1929年５月１日にベルリンで警察と共産党支持者が衝突して30名の死者を出した「血のメーデー」，1932年７月17日にハンブルク・アルトナ地区で警官隊とデモ参加者が衝突して多数の死傷者を出し，その２週間後のパーペン内閣によるプロイセン政府解体の誘因となった「血の日曜日」（アルトナ事件），あるいは1932年８月10日にシュレジエン地方のポテンパでナチ党員が共産党員を惨殺し，ナチスの残忍さを世に知らしめることになった「ポテンパ事件」などである。

[2] Blasius, Dirk, *Weimars Ende: Bürgerkrieg und Politik 1930－1933*, Göttingen 2005, S.9ff. その際，ブラジウスはK.D.ブラッハーによる有名なワイマル共和国崩壊の分析視点である「権力の真空」概念を「秩序の真空」に置き換え，この状態で発生する暴力的な闘争がワイマル共和国の運命にとって決定的であったと指摘する。また，すでに1983年のヤシュケとロイペルディンガーの論文でも以下のような指摘が見られる。「1933年以前，とりわけ大衆の運動への発展局面［1929年以降］でのナチズム運動における暴力の役割や形態に関してはほとんど知られていない」(Jaschke, Hans-Gerd/ Loiperdinger, Martin, Gewalt und NSDAP vor 1933: Ästhetische Okkupation und physischer Terror, in: *Faszination der Gewalt: Politische Strategie und Alltagserfahrung,* Frankfurt a.M. 1983, S.123)。

[3] Volkov, Schulamit, On the primacy of political violence: the case of the Weimar Republic, in: José Brunner u.a.(Hrsg.), *Politische Gewalt in Deutschland: Ursprünge-Ausprägungen-Kosequenzen*, Göttingen 2014, p.56.

[4] Kluge, Ulrich, *Die Weimarer Republik*, Paderborn 2006, S.227ff., 432, 444. 特にナチス突撃隊禁止命令の撤回（1932年６月）により，「国内における内戦ムードはエスカレートし，ほぼ毎日の暴力シーンへと劇的に変化した」（S.432）という。

[5] Büttner, Ursula, Weimar: *Die überforderte Republik 1918－1933: Leistung und Versagen in Staat, Gesellschaft, Wirtschaft und Kultur*, Stuttgart 2008, S.470, Schildt, Axel, *Die Republik von Weimar: Deutschland zwischen Kaiserreich und „Drittem Reich“(1918－1933)*, Erfurt 2009, S.104ff. 後者では「街頭で行進するすべての党派のパラミリタリ―団体がますますもってドイツ初の民主主義の政治文化を規定していた」との記述も見られる（*Ebenda*, S.104）。

[7] Botz, Gerhard, *Gewalt in der Politik: Attentate, Zusammenstösse, Putschversuche, Unruhen in Österreich 1918 bis 1933*, München 1983[2], S.14f.

[8] Merkl, Peter H., Formen der nationalsozialistischen Gewaltanwendung: Die SA der Jahre 1925－1933, in: Mommsen, Wolfgang J./ Hirschfeld, Gerhard [Hrsg.], *Sozialprotest, Gewalt, Terror: Gewaltanwendung durch politische und gesellschaftliche Randgruppen im 19. und 20. Jahrhundert*, Stuttgart 1982, S.425f.

[9] Schumann, Dirk, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918－1933: Kampf um die Straße und Furcht vor dem Bürgerkrieg*, Essen 2001, S.15ff.

[10] Bracher, Karl Dietrich/ Sauer, Wolfgang/ Schulz, Gerhard, *Die nationalsozialistische Machtergreifung: Studien zur Errichtung des totalitären Herrschaftssystem in Deutschland 1933/34*, Köln/ Opladen 1960, Orlow, Dietrich, *The History of the Nazi Party 1919－1933*, Pittsburgh 1969, Hüttenberger, Peter, *Die Gauleiter: Studie zum Wandel des Machtgefüges in der NSDAP*, Stuttgart 1969. 1980年代以降のSAに関するモノグラフとして，以下のものを挙げておく。Merkl, Peter H., *The Making of a Stormtrooper*, Princeton 1980, Fischer, Conan, *Stormtroopers: A Social, Economic and Ideological Analysis 1929－35*, London 1983, Longerich, Peter, *Die braunen Bataillone: Geschichte der SA, München 1989*, Grant, Thomas D., *Stormtroopers and Crisis in the Nazi Movement: Aktivism, ideology and dissolution*, New York/ London 2004, Mitchell, Otis C., *Hitler's Stormtroopers and the Attack on the German Republic*, 1919－1933, Jefferson 2008, Siemens, Daniel, *Stormtroopers: A New History of Hitler's Brownshirts*, New Haven/ London, 2017.

[11] Rohe, Karl, *Das Reichsbanner Schwarz Rot Gold: Ein Beitrag zur Geschichte und Struktur der politischen Kampfverbände zur Zeit der Weimarer Republik*, Düsseldorf 1966, Gotschlich, Helga, *Zwischen Kampf und Kapitulation: Zur Geschichte Reichsbanners Schwarz-Rot-Gold*, Berlin（O）1987, Schuster, Kurt G.P., *Der Rote Frontkämpferbund 1924－1929: Beiträge zur Geschichte und Organisationsstruktur eines politischen Kampfbundes*, Düsseldorf 1975, Finker, Kurt, *Geschichte des Roten Frontkämpferbundes*, Berlin（O）1982.

[12] Diehl, James M., *Paramilitary politics in Weimar Germany*, Bloomington/ London 1977. 岩崎好成「ワイマール共和国における準軍隊的組織の変遷」『史学研究』153号，1981年，同「ワイマル期民間国防団体の政治化」『史学研究』160号，1983年，同「ワイマル共和国防衛組織「国旗団」の登場」（Ⅰ）（Ⅱ）『研究論叢（人文科学・社会科学）』37巻１号／38巻１号，1987年／1988年，同「赤色前線兵士同盟と「政治闘争団体」」『西洋史学報』17号，1990年，同「自立的政治闘争団体と政党政治」（Ⅰ）～（Ⅳ）『山口大学教育学部研究論叢』42巻～44巻，47巻，1992年～1994年／1997年，同「『政治闘争団体』とナチズム運動の擡頭」『現代史研究』43号，1997年。

[13] Bessel, Richard, Militarismus im innenpolitischen Leben der Weimarer Republik: Von den Freikorps zur SA, in: Müller, Klaus-Jürgen u. Opitz , Eckardt（Hrsg.）, *Militär und Militarismus in der Weimarer Republik: Beiträge eines internationalen Symposiums an der Hochschule der Bundeswehr Hamburg am 5. u. 6. Mai 1977*, Düsseldorf 1978.

[14] Ders., *Political Violence und the Rise of Nazism : the Storm Troopers in Eastern Germany 1925－1934*, New Haven/ London 1984, p.vii.

[15] *Ibid.*, p.76.

[16] Ders., Violence as Propaganda: The Role of the Storm Troopers in the Rise of National Socialism, in: Childers, Thomas（ed.）, *The Formation of the Nazi Constituency 1919－1933*, New Jersey 1986, S.133.「ワイマル共和国の最後の数年の間，政治的活動はますます暴力，もしくは少なくとも暴力の脅しを含むようになった」(Ebenda, S.134)。その後，ベッセルは1990年にはワイマル期の政治暴力の問題を政治文化の視点から論じ，さらに近年では広くヨーロッパの20世紀史における暴力の問題にワイマル期の暴力を位置づけるに至っている（Ders., Politische Gewalt und die Krise der Weimarer Republik, in: Niethammer, Lutz（Hrsg.）, *Bürgerliche Gesellschaft in Deutschland: Historische Einblicke, Fragen, Perspektiven*, Frankfurt a.M. 1990, ders., *Violence: A Modern Obsession*, London/ New York/ Sydney/ Tronto/ New Delhi 2015, pp.101ff.）。

[17] Rosenhaft, Eve, Gewalt in der Politik: Zum Problem des „Sozialen Militarismus“, in: Müller/ Opitz（Hrsg.）, *Ebenda*., S.238ff. 1979年の論文でもほぼ同様の内容が論じられており，ワイマル期の暴力の背景を「市民的軍国主義＝パラミリタリズム」の視点から論じつつも，大都市の地域内での具体的日常を分析する必要も指摘している（Dies., Paramilitarismus und politische Gewalt in der Weimarer Republik: Zur Gewaltsamkeit der militärähnlichen Verbände, in: *Beiträge zur Konfliktforschung*, Jg.9, H.4, 1979）。

[18] Rosenhaft, Eve, *Beating the Fascists?: The German Communists and Political Violence 1929－1933*, Cambridge 1983, pp.1ff. 星乃治彦『ナチス前夜における「抵抗」の歴史』ミネルヴァ書房，2007年，21頁以下も参照。

[19] *Ibid*., p.18. 1980年代のローゼンハフトのこのテーマに関する業績には以下のものがある。Dies., Working-class Life and Working-class Politics: Communists, Nazis and the State in the Battle for the Streets, Berlin 1928－1932, in: ders./ Feuchtwanger, Edgar J.（ed.）, *Social Change and Political Development in Weimar Germany*, New Jersey 1981, dies., Die KPD der Weimarer Republik und das Problem des Terrors in der „Dritten Periode”, 1929－1933, in: Mommsen/ Hirschfeld（Hrsg.）, *a.a.O.*, dies., Organising the ‘Lumpenproletariat’: Cliques and Communists in Berlin during the Weimar Republic, in: Evans, Richard J.（ed.）, *The German Working Class 1888－1933: The politics of everyday life*, London 1982, dies., The unemployed in the neighbourhood: Social dislocation and political mobilisation in Germany 1929－1933, in: Evans, Richard J./ Geary, Dick（ed.）, *The German unemployed : Experience and consequences of mass unemployment from the Weimar Republic to the Third Reich*, New York 1987.

[20] Dies., Links gleich rechts?: Militante Straßengewalt um 1930, in: Lindenberger, Thomas/ Lüdtke, Alf（Hrsg.）, *Physische Gewalt: Studien zur Geschichte der Neuzeit*, Frankfurt a.M. 1995.

[21] こうした研究の方向性はイギリスではその後も続き，C.フィッシャーやR.エヴァンスの研究でも暴力の問題が取り上げられている（Fischer, Conan, *The German Communists and the Rise of Nazism*, New York 1991, pp.138ff., Evans, Richard J., *The Coming of the Third Reich*, London 2003, pp.266ff.）。

[22] Striefler, Christian, *Kampf um die Macht : Kommunisten und Nationalsozialisten am Ende der Weimarer Republik*, Berlin 1993, Ehls, Marie-Luise, *Protest und Propaganda: Demonstrationen in Berlin zur Zeit der Weimarer Republik*, Berlin/ New York 1997, Schmiechen-Ackermann, Detlef, *Nationalsozialismus und Arbeitermilieus: Der nationalsozialistische Angriff auf die proletarischen Wohnquartiere und die Reaktion in den sozialistischen Vereinen*, Bonn 1998, Wirsching, Andreas, *Vom Weltkrieg zum Bürgerkrieg? : Politischer Extremismus in Deutschland und Frankreich 1918－1933/39 ; Berlin und Paris im Vergleich*, München 1999, Schumann, Dirk, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik*, ders., Gewalt als Methode der nationalsozialistischen Machteroberung, in: Wirsching, Andreas（Hrsg.）, *Das Jahr 1933: Die nationalsozialistische Machteroberung und die deutsche Gesellschaft*, Göttingen 2009, ders., Political violence, contested public space and reasserted masculinity in Weimar Germany, in : Canning, Kathleen/ Mcguire, Kristin（ed.）, *Weimar publics/ Weimar subjects: rethinking the political culture of Germany in the 1920s*, New York/ Oxford 2010, Reichardt, Sven, *Faschistische Kampfbünde: Gewalt und Gemeinschaft im italienischen Squadrismus und in der deutschen SA*, Köln/ Weimar/ Wien 2002, ders., Gewalt, Körper, Politik: Paradoxien in der deutschen Kulturgeschichte der Zwischenkriegszeit, in: Hardtwig, Wolfgang（Hrsg.）, *Politische Kulturgeschichte der Zwischenkriegszeit 1918－1939*, Göttingen 2005, ders., Violence and Community: A Micro-Study on Nazi Storm Troopers, in: *Central European History*, 46, 2013, ders., Vergemeinschaftung durch Gewalt: Der SA-„Mördersturm 33“ in Berlin-Charlottenburg, in: Hördler, Stefan（Hrsg.）, *SA-Terror als Herrschaftssicherung: „Köpenicker Blutwoche“ und öffentliche Gewalt im Nationalsozialismus,* Berlin 2013, Reschke, Oliver, Der Kampfzeit der NSDAP im roten Friedrichshain, in: *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, 1/2002, ders., *Der Kampf der Nationalsozialisten um den roten Friedrichshain 1925－1933*, Berlin 2004, ders., *Der Kampf um die Macht in einme Berliner Arbeiterbezirk: Nationalsozialisten am Prenzlauer Berg 1925－1933*, Berlin 2008, ders., *Kampf um den Kiez: Der Aufstieg der NSDAP im Zentrum Berlins 1925－1933*, Berin 2014, Fülberth, Johannes, „…*wird mit Brachialgewalt durchgefochten“: Bewaffnete Konflikte mit Todesfolge vor Gericht Berlin 1929 bis 1932/1933*, Köln 2011, Schmidt, Daniel, Die Straße beherrschen, die Stadt beherrschen. Sozialraumstrategien und politische Gewalt im Ruhrgebiet 1929－1933, in: Lüdtke, Alf/ Reinke, Herbert/ Sturm, Michael（Hrsg.）, *Polizei, Gewalt und Staat im 20. Jahrhundert*, Wiesbaden 2011, ders., Die Sturmabteilung und die Staatsgewalt: Zum Verhältnis von SA und Polizei 1930－1934, in: Müller, Yves/ Zilkenat, Reiner（Hrsg.）, *Bürgerkriegsarmee: Forschungen zur nationalsozialistischen Sturmabteilung（SA）*, Frankfurt a.M.2013, Swett, Pamela E., *Neighbors and Enemies: The Culture of Radicalism in Berlin, 1929－1933*, Cambridge 2004, dies., Political Violence, Gesinnung, and the Courts in Late Weimar Berlin, in: Biess, Frank/ Rosemann, Mark/ Schiessler, Hanna（ed.）, *Conflict, Catastrophe and Continuity: Essays on Modern German History*, New York/ Oxford 2007.

[23] さらに最近では政治的暴力の解明からさらに進んで，街頭闘争と社会生活の関連へと研究が広がりつつある。ベルリンを事例に街頭闘争・政治的暴力と小売業や消費行動の関係（窃盗や略奪行為）を問うM.ローベルクの研究もその一つである（Loberg, Molly, *The Struggle for the Streets of Berlin: Politics, Consumption, and Urban Space*, *1914－1945*, Cambridge 2018）。

[24] Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918－1933*, S.11.

[25] *Ebenda*, S.17.

[26] *Ebenda*, S.359.

[27] *Ebenda*, S.228.

[28] レシュケの他に，2013年にはB.ケッシンガーが同じく労働者地区であるノイケルンでのSAの動向をまとめた研究を発表している（Kessinger, Bernd, *Die Nationalsozialisten in Berlin-Neukölln 1925－1933*, Berlin 2013）。なお，ベッセルが指摘しているように，史料の性格上，「政治的暴力の社会史」は地域研究として行われるのが一般的である。すでに見てきたように，残された史料の豊富さや実際の衝突の規模の大きさや激しさ，あるいは首都での影響力の大きさなどから，これまでの研究の大半はベルリンを事例として行われている。この他の地域研究としては，すでに紹介した東プロイセン地域（ベッセル）やザクセン地方（シューマン）の他に，D.シュミットのドルトムントを事例にした研究やA.マケリゴットのハンブルク・アルトナを事例にした研究が挙げられるぐらいである（Schmidt, Die Straße beherrschen, die Stadt beherrschen, McElligott, Anthony, *Contested City: Municipal Politics and the Rise of Nazism in Altona, 1917－1937*, Ann Arbor 1998）。また，ベルリンの

一般史の中でもワイマル期の部分で政治的暴力の問題に言及している。Köhler, Henning, Berlin in der Weimarer Republik（1918－1932）, in: Ribbe, Wolfgang（Hrsg.）, *Geschichte Berlins: Zweiter Band: Von der Märzrevolution bis zur Gegenwart*, Berlin 2002.

[29] Reschke, *Kampf um den Kiez*, S.29.

[30] *Ebenda*, S.48.

[31] Swett, *Neighbors and Enemies*, pp.1f.

[32]「私の第一の目的は，地域的な要求，急進主義，ドイツ最初の共和国の終焉の間の結びつきを究明することである」（*Ibid*., p.22）。

[33] *Ibid*., p.233.

[34] *Ibid*., p.248.

[35] *Ibid*., p.296.

[36] *Ibid*., pp.298f.

[37] Liang, His-Huey, *Die Berliner Polizei in der Weimarer Republik*, Berlin/ New York, 1977（*The Berlin Police Force in the Weimar Republic*, Berkeley/ Los Angels/ London, 1970）, Graf, Christoph, *Politishe Polizei zwischen Demokratie und Diktatur: Die Entwicklung der preußischen Politischen Polizei vom Staatsschutzorgan der Weimarer Republik zum Geheimen Staatspolizeiamt des Dritten Reiches*, Berlin 1983, Leßmann-Faust, *a.a.O*., Dams, Carsten, *Staatsschutz in der Weimarer Republik: Die Überwachung und Bekämpfung der NSDAP durch die preußische politische Polizei von* 1928 *bis 1932*, Marburg 2002.

[38] Liang, *a.a.O*., S.108.

[39] Graf, *a.a.O*., S.46.「共産党やナチスの政治的犯罪に対する政治警察の投入や左翼・右翼過激派の法的に平等な扱いに関して，既存の史料を概観して呼び起される印象は，共和国の政治警察が1932年７月20日までそのような法的に平等な態度を目指してはっきりと努力し，基本的に左翼・右翼過激派の国家の敵を平等に監視し，それと闘っていたことである」（*Ebenda*）。

[40] Striefler, *a.a*.O., S.9f.

[41] *Ebenda*, S.10.

[42] *Ebenda*, S.307f.

[43] もう一人のヴィルシングも，以下のように述べて共産主義とナチスの同質性を強調している。「ベルリンのナチ党によって倒錯された正当防衛・秩序原理は全体主義的な世界観の名の下での熱狂と暴力を生み出したが，この世界観は“ファシスト的な”自助の原理をはるかに越えて，共産主義の敵とともに同時に民主主義的法治国家をも否定しようとするものであった」(Wirsching, *a.a.O*., S.446)。彼の全体主義論的解釈に対しては後にライヒャルトが７つの点から共産主義とナチズムの異質性を指摘して批判・反論している（Reichardt, Sven, Totalitäre Gewaltpolitik?: Überlegungen zum Verhältnis von nationalsozialistischer und kommunistischer Gewalt in der Weimarer Republik, in: Hartwig, Wolfgang（Hrsg.）, *Ordnungen in der Krise: Zur politischen Kulturgeschichte Deutschlands 1900－1933*, München 2007）。

[44] Bessel, Militarismus im innenpolitischen Leben der Weimarer Republik, S.203.

[45] Rosenhaft, Paramilitarismus und politische Gewalt in der Weimarer Republik, S.136.「戦間期には，このような部隊はほぼすべてのヨーロッパ諸国に存在していた。ドイツに関して特徴的だったのはその規模，純粋に数的なものであった。すべてを合わせたメンバー数は数十万人から百万に達していた。その上，諸団体はドイツでは自明なものであったが，それはこれらの日常性や常在性ゆえにだけでなく，それらが特殊ドイツ的あるいはいずれにしてもプロイセン的とみなされる軍事的価値や態度の伝統を保持していることを主張していた。これらの部隊が担ったと思われる暴力の規模もドイツほど目立ち，重大な結果をもたらしたところはなかった」（Ebenda）。Th.バリスティアは「社会一般の現象としてのパラミリタリズム」と記している（Balistier, Thomas, *Gewalt und Ordnung: Kalkül und Faszination der SA*, Münster 1989, S.165）。

[46]「戦後社会に場所を見出せなかった男たちが準軍事的文化の種を提供し，この形態で続く14年間のドイツの政治を悩ませることになった」（Grant, *op.cit*., p.39.）。

[47] Jaschke/ Loiperdinger, a.a.O., S.127.「ワイマル共和国において出現した政治的対立の暴力的形態はドイツ官憲国家の軍国主義的伝統にその本質がある。この伝統がいま一度とりわけひどく現れた第一次世界大戦後，それはワイマル共和国の「私的軍隊」の中で生き続けた。つまり，武装した，あるいは制服を着た政党内の集団，し

かし，例えば義勇軍のような自律的団体や例えば鉄兜団のような国防団体であった」(Ebenda, S.124)。ライヒャルトも「政治生活のますますの軍国主義化」に言及しており，「結局のところ，準軍隊的なスタイルは合法的な政治形態とみなされた」と述べている（Reichardt, Totalitäre Gewaltpolitik?, S.399)。わが国では，今井宏昌氏が第一次大戦後（ワイマル共和国初期）の政治的暴力を義勇軍を事例に分析し，この暴力を中期以降の政治的暴力の起点とみなしている（今井宏昌『暴力の経験史―第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験1918～1923』法律文化社，2016年)。

[48] Schildt, *a.a.O.*, S.107, Rosenhaft, Gewalt in der Politik, S.250f.

[49] Ehls, *a.a.O.*, S.230.

[50] Vgl. Siemens, *op.cit.*, S.43.

[51] Grant, *op.cit.*, p.39.

[52] Rosenhaft, Paramilitarismus und politische Gewalt in der Weimarer Republik, S.135, Balistier, *a.a.O.*, S. 146.

[53] Schmidt, Die Straße beherrschen, die Stadt beherrschen, S.241, Siemens, Daniel, Prügelpropaganda: Die SA und der nationalsozialistische Mythos vom »Kampf um Berlin«, in: Wildt, Michael/ Kreutzmüller, Christoph（Hrsg.)，*Berlin 1933－1945*, Berlin 2013, S.37, Volkov, op.cit., p.63.

[54] Bessel, Politische Gewalt und die Krise der Weimarer Republik, S.384.

[55] Ders., *Violence: A Modern Obsession*, p.111.「ドイツの政治は1920年代と1930年代に，第一次世界大戦以前よりも暴力的なものになってしまった。戦後，暴力はドイツの政治生活の際立った特徴となった。人びとは，たとえ暴力を必ずしも歓迎していなかったにせよ，政治活動は暴力を含むことを予期するようになったのである」（*Ibid.*, p.101)。

[56] *Rosenhaft, Beating the Fascists?*, p.3, Striefler, *a.a.O.*, S.337. 近年でも，同様の状況をブラジウスが「政治的な闘争行為の遍在」，マケリゴットやレシュケが暴力の「日常（化)」，ライヒャルトが「自己生産的な暴力のスパイラル」と表現している(Blasius, *a.a.O.*, S.13, McElligott, *op.cit.*, p.182, Reschke, Oliver, Der Kampfzeit der NSDAP, S.31, ders., *Kampf um den Kiez*, S.48, Reichardt, Vergemeinschaftung durch Gewalt, S.127）。レスマン＝ファウストは「議会の機能喪失」や「国会の手詰まり状態」に伴い政治対立の場が議会から街頭へ移り，その結果，議会主義的な政党の正当性に対して街頭を舞台に活動するパラミリタリー組織が異議を唱えるようになったと指摘しているが，こうした動きにより，ローゼンハフトの表現を借りると，社会対立が暴力の方向へと尖鋭化していったのであった（Leßmann-Faust, *a.a.O.*, S.245, Rosenhaft, Links gleich rechts?, S.239)。スウェットはこうした状況を以下のように描写している。「このような対立は日や時間に関係なく発生し，阻止することは不可能であった。…それはまた，攻撃と反撃の連鎖に終わりを見ることができないベルリン市民に混乱を招いていた」(Swett, *Neighbors and Enemies*, p.234)。

[57] Volkov, a.a.O., p.58, 67.

[58] Haupt, Heinz-Gerhard, *Gewalt und Politik in Europa des 19. und 20. Jahrhunderts*, Göttingen 2012, S.94.

[59] Jaschke/ Loiperdinger, a.a.O., S.127.

[60] Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik*, S.228 u. 245.「明白なのは，右翼・左翼の国防団体を通じてますます軍隊的要素がワイマル共和国の政治的社会文化の中へ持ち込まれたということである」（*Ebenda*)。

[61] Schulz, Petra Maria, *Ästhetisierung von Gewalt in der Weimarer Republik*, Münster 2004, S.201.「暴力の描写，暴力を用いた脅し，暴力の利用自身は，ポジティブな意味を含んだ行動モデルを示す，象徴的な特質を具えていた。紛争と闘う手段として暴力を投入する気構えは，非ブルジョア的，反民主主義的，非合理的なイメージに刻印された政治的な「考え方」を示しており，そのことは議会主義に対する明らかに近代的な代理選択肢として外見上は効果的な紛争解決モデルを提供し，同時に敵・味方の図式の枠内で政敵の生存権を否定していた。合理性，言葉，議論，そして妥協が民主主義の「弱点」の現れと評価される一方で，「暴力」を行動規準として宣伝していた者は決断的，活動的，貫徹力がある者とみなされた」(*Ebenda*, S.205.)。ワイマル憲法のもとで議会制度を通じた理性的な議論を前提としていたワイマル期の政治文化では，政治的暴力がその中心になることはありえなかった。ただ，それはサブカルチャーとしてワイマル期の政治文化として表出したため，しばしば「暴力のサブカルチャー」と形容されてきた。例えば，エールスは次のように指摘している。「労働者地区におけるナチスの行進において SA が誘発した暴力行為と，特に1930年代にはデモの外側で発生した敵対団体のメンバー

の間でのそのほかの衝突は，政治的暴力のサブカルチャーへと至り，それが公的な生活にすっかり浸透していった」（Ehls, *a.a.O.*, S.396）。この他にも1982年にマークルがベルリンにおける「政治的暴力の独特のサブカルチャー」の形成を指摘し，グラントも「共和国の持続のための公的生活を台無しにする政治的暴力の文化」の言及している（Merkl, Formen der nationalsozialistischen Gewaltanwendung, S.431, Grant, *a.a.O.*, S.38）。

[62] Bessel, Violence as Propaganda, p.137. 近年では，ヴィルシングも戦争を経験していた当時18歳から25歳の若者にとって「街頭という戦争に取って代わる舞台は明らかに特別な魅力をもたらした」と指摘している（Wirsching, *a.a.O.*, S.445）。

[63] Müller, Yves/ Zilkenat, Reiner（Hrsg.）, *Bürgerkriegsarmee : Forschungen zur nationalsozialistischen Sturmabteilung*（*SA*）, Frankfurt a.M. 2013, Wackerfuss, Andrew, *Stormtrooper families : homosexuality and community in the early Nazi movement*, New York 2015, Siemens, *Stormtroopers.*

[64] Voigt, Carsten, *Kampfbünde der Arbeiterbewegung : Das Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold und der Rote Frontkämpferbund in Sachsen 1924－1933*, Köln 2009. ザクセンに関しては，近年，Ch.ヘルマンが同地域でのRFBの展開を写真や史料を交えて年表形式でまとめている（Hermann, Christian, *Roter Frontkämpferbund*（*RFB*）*in Dresden und Ostsachsen 1924－1929 : Chronik-Bilder-Dokumente*, Leipzig 2014）。

[65] Böhles, Marcel, *Im Gleichschritt für die Republik : Das Reichsbanner Schwarz-Rot-Gold im Südwesten, 1924 bis 1933*, Essen 2016.

[66] ベッセルはそれを「ワイマル共和国の暴力に刻印された政治的公共圏」と呼んでいる（Bessel, Politische Gewalt und die Krise der Weimarer Republik, S.397）。

[67] Schulz, *a.a.O.*, S.205. Vgl. Mennen, Kristian, *Selbstinszenierung im öffentlichen Raum : Katholische und sozialdemokratische Repertoire- diskussionen um 1930*, Münster 2013, S.292.

[68] *Schumann, Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918－1933*, S.11. 別の論文でも，シューマンはワイマル中・後期の政治的暴力を議会や政府による統治に代わって，公共空間の制御を求める「新しいスタイルの政治の副産物」とみなし，その結果が政治文化の軍隊化と公共圏の「競合」であったと述べている（Ders., Political violence, contested public space and reasserted masculinity in Weimar Germany, p.242）。

[69] Jaschke/ Loiperdinger, a.a.O., S.146. こうした公共圏における政治勢力の競合を様々なシンボルを用いた公共圏の「視覚的支配」の観点から分析したものとして，Paul, Gerhard, *Aufstand der Bilder: Die NS-Propaganda vor 1933*, Bonn 1990, ders., Krieg der Symbole : Formen und Inhalte des symbolpublizistischen Bürgerkrieg 1932, in : Krebs, Diethart/ Stahr, Henrich（Hrsg.）, *Berlin 1932 : Das letzte Jahr der ersten deutschen Republik : Politik, Symbole, Medien*, Berlin 1992.

[70] Bessel, Violence as Propaganda, p.141. ベッセルは1990年にも「1933年以前のNS運動の政治的暴力は“第三帝国”の最初の数か月の経過を決定的に刻印することになった」と述べている（Bessel, Politische Gewalt und die Krise der Weimarer Republik, S.389）。

[71] Weisbrod, Bernd, Gewalt in der Politik : Zur politischen Kultur in Deutschland zwischen den beiden Weltkriegen, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 43（1992）, S.391. ヴァイスブロットによると，ナチス体制への転換やその強化の前提がワイマル期における非合法の暴力の使用とその許容であった（Ebenda, S.392）。

[72] *Swett, Neighbors and Enemies*, p.294. Vgl. Blasius, *a.a.O.*, S.21, Volkov, a.a.O., S.67. シューマンは「この暴力［ナチ政権成立後のSAの暴力］は自然災害のようにドイツ社会に突然降りかかってきたのではなかった」という興味深い表現を用いている（Schumann, Gewalt als Methode der nationalsozialistischen Machteroberung, S.135）。

[73] Rosenhaft, *Beating the Fascists?*, p.10.「キーツ」とはローゼンハフトによると，「近隣社会の中の近隣社会」，「独自の習慣や態度を持つ密集した共同体」であり，そこに住む住民は地域への高い帰属意識と忠誠心を持つものとされる。Vgl. Reschke, *Kampf um den Kiez*, S.16.

[74] Rosenhaft, Gewalt in der Politik, S.248, dies., Links gleich rechts?, S.271.

[75] Swett, *Neighbors and Enemies*, p.237, 248, 251, 286, 295.

[76] Rosenhaft, Paramilitarismus und politische Gewalt in der Weimarer Republik, S.141.「「命令」は友人グループを通じて回り，「戦場」は自らの居住地区であった」。

[77] Lenger, Friedrich, *Metropolen der Moderne : Eine europaeische Stadtgeschichte seit 1850*, München 2013,

S.390.

[78] シュトリーフラーは共産党の街頭闘争への参加者の理念型を「未婚，無宗派の20代半ばの失業者で，その生涯のすべてを実際に狭い自らの地区内で過ごしてきた者」としている（Striefler, *a.a.O.*, S.317）。

[79] Rosenhaft, *Beating the Fascists?*, pp.15f. Fischer, *The German Communists and the Rise of Nazism*, p. 138.

[80] Mennen, *a.a.O.*, S.289. Vgl. Rosenhaft, Links gleich rechts?, S.247.

[81] McElligot, *op.cit.*, pp.169f.

[82] Rosenhaft, *Beating the Fascists?*, p.18.

[83] Reichardt, Vergemeinschaftung durch Gewalt, S.115, Reschke, *Kampf um den Kiez*, S.33.

[84] Siemens, Daniel, *Horst Wessel : Tod und Verklärung eines Nationalsozialisten*, München 2009, S.93, ders., *Stormtroopers*, p.40. 政治的暴力を近隣社会＝コミュニティ内での動きとみなす場合，近隣社会への帰属意識が政党への帰属意識に優先することになり，そこには事情や意識の変化による党派間（共産党とナチス）の移動の問題が浮かび上がってくる。スウェットは「チャンスが与えられないと政治的闘争におけるサイドを変えることを不道徳だと思わない者もいた」と述べて，「敵」と「味方」は近隣社会においては非常に流動的であったと指摘している。「急進的な労働者たちは日々の政治的要求を反映した選択を行っていたのであり，自らの地域的単位がもはやこれらの問題を―その公的な活動，物質的手段，肉体的勇敢さを通して―扱うだけの力がないように思えたとき，若者たちはより「成功した」グループに加わったり，党への加入すべての拒絶することをためらわなかった」（Swett, *Neighbors and Enemies*, pp.296f.）。ローゼンハフトも共産党とナチスの間のメンバーの移動について「近隣社会内での個人的な力や威信の利害を追いかけるための手段として政治的組織を利用しようとする現場の若者の試み」と解釈している（Rosenhaft, Links gleich rechts?, S.256）。

[85] Botz, *a.a.O.*, S.16.

[86] Merkl, Formen der nationalsozialistischen Gewaltanwendung, S.426, Jaschke/ Loiperdinger, a.a.O., S.146.

[87] Bessel, Violence as Propaganda, p.136. その後，1989年にはバリスティアがSAを街頭での「象徴表現の担い手」と呼び，レスマン＝ファウストがSAやRFBの活動を「プロパガンダ的暴力行為」と表現している（Balistier, *a.a.O.*, S.34, Leßmann-Faust, *a.a.O.*, S.227）。同様の指摘として，Ehls, *a.a.O.*, S.386, McGowan, Lee, The extreme right, in: Panayi, Panikos（ed.）, *Weimar and Nazi Germany: Continuities and Discontinuities*, Harlow 2001, p.253, Röpenack, Arne von, *KPD und NSDAP im Propagandakampf der Weimarer Republik: Eine inhaltsanalytische Untersuchung in Leitartikeln von „Rote Fahne“ und „Angriff“*, Stuttgart 2002, S.44, Friedrich, Thomas, *Die missbrauchte Hauptstadt: Hitler und Berlin*, Berlin 2007, S.139. レーペナックは「ナチスのプロパガンダのさらに重要な要素が，とりわけSAサイドで行われた暴力の行使であった」と言う。

[88] Reichardt, Violence and Community, p.297. Vgl. Siemens, Prügelpropaganda, S.37.

[89] Mennen, *a.a.O.*, S.290.

[90] Rosenhaft, Links gleich rechts?, S.253ff.

[91] Bessel, Violence as Propaganda, p.135. 別の論文でも，ベッセルは次のように記している。「ワイマルの最後の数年における街頭での政治的暴力は非常に広く流布したにもかかわらず，それが内戦へと成長することはなかった。1932年ごろのドイツにおける政治的闘争団体内の若者の数に目をやれば，驚かされるのはむしろ政治的衝突で殺害された者の数の少なさである」。その上で，ベッセルは例えばIRAの北アイルランド紛争などに比べて「ワイマル共和国の最後の数年間のナチスの街頭闘争が実際のところいかに限定的なものであったか」という点を強調している（Bessel, Politische Gewalt und die Krise der Weimarer Republik, S.389）。

[92] Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918－1933*, S.235.「ワイマル末期の暴力は，それに応じた政治的意志を前提にして，少なくとも統制されうるものであった」（*Ebenda*, S.365）。Vgl. Ders., Schumann, Gewalt als Methode der nationalsozialistischen Machteroberung, S.140.

[93] Ders., Political violence, contested public space and reasserted masculinity in Weimar Germany, p.244.

[94] Bessel, Violence as Propaganda, p.135.

[95] Ebenda, p.143.

[96] Leßmann-Faust, *a.a.O.*, S.228. その後の同様の指摘として，Ehls, *a.a.O.*, S.245 u.443, Rosenhaft, Links gleich rechts?, S.240, McGowan, op.cit, p.253, Reschke, *Kampf um den Kiez*, S.33 u.60.

[97] Lindenberger, Thomas, *Straßenpolitik : Zur Sozialgeschichte der öffentlichen Ordnung in Berlin 1900 bis*

1914, Bonn 1995, S.11ff.

[98]「上からの街頭政治として，街頭に関連した措置と公秩序の維持のための戦術が統合される。それは，社会的規律化の決定的なプロセスの一部であり，そこではとりわけ―しかし，それだけではない―下層民に対して近代化しつつある工業社会の行動基準が「教え込まれる」ことになる」(Lindenberger, *a.a.O.*, S.15)。

[99]「あらゆる紛争行動の「近代的」な合理化にもかかわらず，直接行動は残ったままであり，たいていはそれと結合している肉体的・象徴的暴力は社会的・政治的な対立の一部のままである」(*Ebenda*, S.17)。

[100] *Ebenda*, S.19.

[101] Schmidt, Die Straße beherrschen, die Stadt beherrschen, S.226ff.

[102] Ebenda, S.228.

[103] Ebenda, S.235.

[104] Ebenda, S.239. シュミットによると，ナチスの政権獲得後の「テロ行動」は上と下からの街頭政治の結節点であった（Schmidt, Die Straße beherrschen, die Stadt beherrschen, S.245)。同様に，シューマンも「新しい街頭政治」として以下の指摘を行っている。「政治はますます街頭で行われた。外見から認識できる敵と遭遇する回数は激しく増大し，暴力的対決の確率を高めた」(Schumann, *Politische Gewalt in der Weimarer Republik 1918－1933*, S.245f.)。

[105] Bracher u.a., *a.a.O.*, S.843.

[106] Rosenhaft, Working-class Life and Working-class Politics, p.215. 彼女は1983年の著書でも酒場を「ベルリン住民の公的生活の中心」に位置づけ，突撃隊酒場の出現により酒場やその周辺に政治的な暴力が集中していったことに言及している（Dies., *Beating the Fascists?*, pp.19ff.）Vgl. Dies., Links gleich rechts?, S.240ff.

[107] Schmiechen-Ackermann, *a.a.O.*, S.380, Ehls, *a.a.O.*, S.438.

[108] Fülberth, *a.a.O.*, S.22.

[109] *Ebenda*, S.35. 同様の指摘として，Leßmann-Faust, *a.a.O.*, S.228, Winkler, Heinrich August, Abschied von Weimar： Ein politisches Portrait des Jahres 1932, in： Krebs/ Stahr（Hrsg.)，*a.a.O.*, S.18, McElligott, *op. cit.*, p.178, Lenger, *a.a.O.*, S.391.

[110] Swett, *Neighbors and Enemies*, pp.254f. こうした政治的に機能する酒場の存在はワイマル期に限定されるものではなく，第二帝政期からの伝統となっていた。この点については，シュトリーフラー，シュミーヒェン＝アッカーマンやレシュケが指摘しており，そこではナチスや共産党の酒場が第二帝政期の社会民主党のプロレタリア酒場文化を受け継ぐものであった点が明らかにされている（Striefler, *a.a.O.*, S.340, Schmiechen-Ackermann, *a.a.O.*, S.375f., Reschke, *Kampf um den Kiez*, S.49f.)。拙稿「第二帝政期ドイツにおける酒場と「政治」」『鳴門教育大学研究紀要』第31巻（2016年）参照。

[111] Schmiechen-Ackermann, *a.a.O.*, S.376ff., Reichardt, *Faschistische Kampfbünde*, S.449ff., ders., Violence and Community, pp.288ff., ders., Vergemeinschaftung durch Gewalt, S.122ff., Siemens, *Horst Wessel*, S.90f., ders., Prügelpropaganda, S.38ff. この他にも，Wirsching, *a.a.O.*, S.457, Schumann, Gewalt als Methode der nationalsozialistischen Machteroberung, S.138, Reschke, Oliver/ Wildt, Michael, Aufstieg der NSDAP in Berlin, in： Wildt/ Kreutzmüller（Hrsg.)，*a.a.O.*, S.25ff., Reschke, *Kampf um den Kiez*, S.102ff.

[112] 突撃隊酒場の機能として，ライヒャルトは①酒場内部での SA 隊員の社会的な関係を強化と外部からの断絶，②アルコール消費と酒宴の統合メカニズム，③酒場内での武器の隠匿，④酒場内での「暴力の文化 Gewaltkultur」の共有と隊員の統制，⑤ SA の任務の計画・立案場所や行動のための集合場所などを挙げている。

[113] Reichardt, *Faschistische Kampfbünde*, S.462.

[114] 近現代ドイツにおける酒場の政治的機能に関しては，概説書でのわずかな言及を除くと，わが国ではこれまでほとんど研究されていない。それは，ドイツでは歴史学の関心が「酒場の政治化」に向かう一方で，わが国では酒場が個人の娯楽や飲食といった私的な場とみなされ，公的なもの（＝政治）と切り離されてきたことと無縁ではないだろう。ワイマル期の政治的酒場に言及したものとしては，星乃，前掲書，21頁以下の他に，拙稿「赤いベルリンとナチズム」『歴史家のパレット』渓水社，2005年，同「1930年代初頭のベルリンにおける政治的街頭闘争」『史学研究』282号，2013年。

[115] これまでの研究は政治的暴力が集中的に発生したワイマル共和国最後の年である1932年に関心を向けてきたが，こうした暴力事件は相対的安定期と呼ばれる1920年代中盤以降にすでに発生しており，ワイマル共和国中・後期を通じた分析も同時に必要とされてくるだろう。

【付記】本稿はJSPS科研費（基盤研究（C），課題番号：18K01036）の助成による成果の一部である。

Der aktuelle Forschungsstand über die politische Gewalt in den Phasen der relativen Stabilisierung und der Auflösung der Weimarer Republik

HARADA Masahiro

(Keywords : Weimarer Republik, Politische Gewalt, Sozialgeschichte, Politische Kultur)

Das Ziel dieser Abhandlung ist es, der Forschungsgeschichte über die politische Gewalt in Großstädten wie Berlin in den Phasen der relativen Stabilisierung und der Auflösung der Weimarer Republik (1924－1933) zu folgen, die Diskussionspunkte in der Forschung aufzuklären und auf die darausfolgenden Aufgaben hinzuweisen.

Das Thema wurde zuerst in den 1960er Jahren haupusächlich durch Organisationsanalysen der politischen Parteien und Kampfbünden gemacht. Diese spielten in den Straßenkämpfen die Rolle als Subjekte der Gewalt. In den 1980er Jahren hatten die Historiker/-in im angloamerikanischen Raum „die Sozialgeschichte der politischen Gewalt“ eingeleitet und dabei insbesondere die Situation in Berlin als Gegenstand der Forschung entdeckt. Erst seit den 1990er Jahren sind ähnliche wichtige Monografien auch im deutschsprachigen Raum veröffentlicht worden.

Die Sozialgeschichte der politischen Gewalt hat das Augenmerk auf die „Orten der Gewalt“ wie Nachbarschaft, Straßen und Plätze, oder Kneipen und Lokalen im Arbeiterviertel gelegt und versucht, die wirklichen Sachlagen der politischen Gewalt im Alltag zu erfassen. Von nun an muss man sie vor allem unter den Gesichtspunkten wie „Paramilitarismus“, „politische Kultur“ oder „Propaganda“ weiter analysieren, indem man mehrere historische Quellen wie z.B. Polizeiakten oder Gerichtsakten analysiert. Die Vertiefung dieser Forschung kann nicht nur zu einem Erklärungsfaktor, mit dem man den Übergang von der Weimarer Republik zur nationalsozialistischen Herrschaft auslegen kann, führen. Darüber hinaus sollte auch Material, aus dem man an „Gewalt in der Bürgergesellschaft” denken kann, untersucht werden.